

石見銀山と温泉津

ここから左の旧道は山や深い森を抜け、石見銀山の歴史に欠かせない役割を果たした日本海側の港町、温泉津に向かう。16 世紀、石見銀山はしばしば「温泉（ゆの）銀山」と呼ばれた。これは、1527 年に銀が発見されるまでは温泉地としてしか知られていなかった温泉津と、銀山が共生していたことに由来する。

銀山が発見されると温泉津は銀山を供給する主要港として、また中国や朝鮮半島など他国との交易の拠点として栄えた。世界中で取引される銀の約 1 割が石見銀山からもたらされていた 1500 年代後半には、温泉津の隣にある沖泊という小さな入江が鉱山から国内外の市場へ銀を出荷するのに使われた。

徳川幕府は 1600 年代初頭に石見銀山を支配下に置いた後、温泉津を経由する銀の輸送を終了させたが、町は江戸時代（1603～1867 年）を通じて銀山の主要な物資の供給源であり続け、海上貿易の中心地でもあった。現在の温泉津の町割りはこの豊かな時代にさかのぼり、いくつか残っている古い建物もこの時代のものである。町に残る 2 つの伝統的な温泉も往時を偲ばせる。